

国立国語研究所学術情報リポジトリ

在華宣教師資料の二字語とその語構成的特徴： 蘭学資料の二字漢語との対照を兼ねて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): two-Chinese-character word, missionaries' documents in China, written documents of Dutch Studies, word formation pattern, morpheme 作成者: 朱, 京偉, ZHU, Jingwei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000821

在華宣教師資料の二字語とその語構成的特徴 ——蘭学資料の二字漢語との対照を兼ねて——

朱 京偉

北京外国语大学／国立国語研究所 理論・構造研究系 客員教授 [-2010.10]

要旨

筆者は、先行の小論（朱京偉 2015）で蘭学資料の二字漢語を考察した。本稿の目的は、引き続き、宣教師資料の二字語を取り上げ、蘭学資料の二字漢語との比較対照を行なうことにある。主な結論は以下の諸点にまとめられる。

まずは、二字語の語構成パターンで、日中間の相違がよく現れたのは連体修飾関係の二字語である。N+N型、V+N型、A+N型という3タイプのうち、宣教師資料ではN+N型の比率が高いのに対し、蘭学資料では逆にV+N型とA+N型の比率が高くなっていることが指摘できる。

次に、対象となった宣教師資料と蘭学資料では、日中共通の二字語が計186語となるが、この中で、漢籍由来の「出典あり」の語は85.5% (159語) を占め、「新義あり」の語と「出典なし」の語は合わせて14.5% (27語) を占めている。日中共通の「出典あり」の語は、蘭学資料と宣教師資料の間に借用関係が存在するというよりも、日中双方で年代の古い漢籍から別々に取り入れられたものだろうと思われる。一方、日中共通の「出典なし」の語は、①日中双方で別々に造られ、語形が偶然に一致したもの、②調査範囲の制約でより早い出典例が発見できなかったもの、③何らかのルートで蘭学資料から宣教師資料に伝わったもの、という三通りに振り分けられる。

最後に、二字語と三字語のつながりについては、今回の調査で、二字語の後語基で、造語数が多いほど、三字語の後部一字語基として用いられる確率が高いことが明らかになった。一方、二字語と四字語のつながりについては、宣教師資料で、四字語の前語基と後語基に用いられた二字語がそれぞれ二字語全体の3.7%と5.0%しか占めていないことから、両者のつながりがかなり薄いということが指摘できる。

キーワード：二字語、在華宣教師資料、蘭学資料、漢語の語構成、漢語の語基

1. はじめに

先行の小論（朱京偉 2015）で蘭学資料の二字漢語を取り上げ、その構成パターンや語基の性質と造語力などについて検討した¹。本稿の目的は、宣教師資料の二字語についての用語調査を実施し、その性質や特徴を明らかにするとともに、蘭学資料の二字漢語との比較対照を行なうことにある²。

用語調査では、宣教師資料の三字語・四字語を調査した時と同様の資料を利用する。まず、各資料から宣教師達の新造語が多く含まれる二字の専門語及び日中同形語を中心とする二字の一般

¹ 同論文で取り上げた蘭学資料は、志筑忠雄訳『暦象新書』(1798)、宇田川玄真著『医範提綱』(1805)、杉田立卿訳述『眼科新書』(1815)、帆足万里撰『窮理通』(1836)、川本幸民訳『氣海觀瀾廣義』(1851)、広瀬元恭訳『理學提要』(1852)、緒方洪庵訳『扶氏経験遺訓』(1857)の7種である。

² 中国語の語彙には、漢語・和語・外来語といった日本語の語種に相当するものが存在しないため、宣教師資料では「二字漢語」ではなく、「二字語」と呼んで蘭学資料の場合と区別するようにした。なお、蘭学資料の「三字漢語・四字漢語」に対して、宣教師資料では「三字語・四字語」と名付けたのも同じ理由による。

語を重点的に抽出する。次に、抽出した二字語を資料の年次順に並べ、重複の語を除いて異なり語に整理する。同一の語が複数の資料から抽出された場合は、最初に出現したものを登録し、それ以外のものを除去する。その結果、表1に示した1653語に整理できたが、これを本稿の研究対象とする。

表1 調査対象となる宣教師資料と二字語の抽出語（異なり語数）

資料名	分野	総字数	抽出語	版本
1853《遐邇貫珍》麦都思編	雑誌	43.6万	310	香港英華書院印刷
1854《博物新編》合信著	自然科学	4.9万	182	明治5年（1872）江戸老泉館
1857《六合叢談》偉烈亜力編	雑誌	19.5万	435	上海墨海書館印
1858《内科新説》合信著	医学	5.4万	179	安政庚申（1860）天香堂蔵版
1864《万国公法》丁韙良訳	国際法	8.1万	55	慶応元年（1865）京都崇実館
1868《格物入門》丁韙良著	自然科学	7.9万	104	明治2年（1869）明親館蔵版
1876《格物探原》韋廉臣著	自然科学	10.6万	54	光緒2年（1876）活字板印
1887《電学須知》傅蘭雅著	電気学	1.3万	46	未詳、実藤文庫所蔵
1890《西国天学源流》王韜訳	天文学	1.9万	22	淞隱廬活字版
1890《重学浅説》王韜訳	力学	1.2万	54	光緒庚寅（1890）淞北逸民校刊
1894《全体須知》傅蘭雅著	医学	1.5万	139	未詳、実藤文庫所蔵
1896《格致質学啓蒙》艾約瑟著	物理学	5.5万	27	上海著易堂書局発兌
1896《身理啓蒙》艾約瑟著	生理学	6.1万	46	上海著易堂書局発兌
		117.5万	1653	

表1を見ると、各資料の総字数がそれぞれ違っているが、全体的には、抽出語の大半が先頭に位置する数種の資料に集中している傾向が読み取れる。これは、前述のように、異なり語に整理する段階で、最初に出現した語を登録し、それ以外の語を除外するという作業方法によってもたらされた結果である。この中で、《全体須知》（1894）の抽出語数だけが突出して見えるのは、同書には身体部位を表す専門語（骨衣、骨節、骨盆、…／手骨、舌骨、面骨、…）が数多く用いられていたためだと思われる。

抽出語の語数についての日中比較をすると、総字数117.5万に及ぶ宣教師資料からは異なりで1653語の二字語が抽出されているのに対して、総字数101.8万に及ぶ蘭学資料からは異なりで755語の二字漢語しか抽出されていない³。総字数の差がそれほど大きくないのに、抽出された二字語の語数には2倍以上の開きが見られる。このことについては、日中資料の文体的相違を考える必要がある。宣教師資料は、いわば、漢語一色の文章からなっているが、蘭学資料は、漢字仮名混じり文が中心なので、漢語のほかに和語や音訳の漢字表記語も相当数に及んでいる。この相違は、蘭学資料の二字漢語が語数の面で宣教師資料に及ばない結果をもたらした最大の理由と言えよう。本稿では、二字語の語構成を調べることを第一の目的とするので、二字語の語数をパーセンテージに置き換えることで、日中対照に影響を与えないようにしたい。

³ 蘭学資料の総字数及び二字漢語の抽出等については、朱京偉（2011a, 2015）を参照。

2. 二字語の語構成パターン

二字漢語の語構成に関する先行研究及び筆者自身の分類方法については、蘭学資料の二字漢語を取り上げたときに述べたので、先行の小論（2015）を参照されたい。以下では、筆者自身の語構成パターンに基づき、宣教師資料の二字語を分類するとともに、蘭学資料の二字漢語との比較を行なう。（表2の網掛け部分については、2.1～2.3で検証する。なお、Nは名詞性語基、Vは動詞性語基、Aは形容詞性語基、Mは副詞性語基、Sは接詞性語基を表す）。

表2 二字語における語基の品詞性とその結合関係

品詞性	内部の結合関係	語数 (%)	語例	蘭学資料での比率	
名詞性語 (N) 1232語 (74.5%)	N+N 連体修飾関係	800 (48.4)	公理、骨格、国境、地軸、電線	35.5%	74.8%
	V+N 連体修飾関係	212 (12.8)	印本、活字、教師、食品、属地	20.8%	
	A+N 連体修飾関係	195 (11.8)	外界、原稿、雑誌、重質、熱帶	17.4%	
	N+N 並列関係	23 (1.4)	階級、功用、才能、都会、律法	1.0%	
	N+S 補助関係	2 (0.1)	腔子、腰子	0	
	音詞性語	0		0.1%	
動詞性語 (V) 409語 (24.8%)	V+V 並列関係	66 (4.0)	教授、生育、成立、発行、分散	7.5%	23.7%
	V+V 連用修飾関係	112 (6.8)	活動、吸引、交感、推定、分化	5.2%	
	V+V 述補関係	10 (0.6)	關於、吸入、導入、認為、燃着	2.6%	
	A+V 連用修飾関係	19 (1.2)	確知、強制、近視、常用、同化	2.4%	
	V+N 述客関係	122 (7.4)	過半、生根、中風、入浴、用兵	2.3%	
	M+V 連用修飾関係	30 (1.8)	過食、現存、自主、特派、予定	1.5%	
	N+V 連用修飾関係	32 (1.9)	公判、上昇、中和、内容、風化	1.5%	
	N+V 主述関係	11 (0.7)	血行、地震、主觀、便秘、脈動	0.4%	
	V+A 述補関係	7 (0.4)	維新、贊美、縮小、証明、放大	0.3%	
形容詞性語 (A) 12語 (0.7%)	M+A 連用修飾関係	4 (0.2)	過久、過多、過濃、断然	0.7%	1.5%
	A+A 並列関係	6 (0.3)	可能、簡明、全能、低下、野蛮	0.5%	
	M+V 連用修飾関係	0		0.1%	
	N+S 補助関係	1 (0.1)	天然	0.2%	
	N+A 主述関係	1 (0.1)	腹痛	0	
合計		1653 (100)			

表2の通り、宣教師資料の二字語には、名詞性のものが74.5%を占め、最も多い。動詞性のものが24.8%となっており、形容詞性のものはわずか0.7%に過ぎない。これに対して、蘭学資料の二字漢語では、名詞性のものが74.8%、動詞性のものが23.7%、形容詞性のものが1.5%となっているので、日中双方の品詞性の大枠がかなり似通っていることがわかる。

表2には、蘭学資料の二字漢語にない「N+S 補助関係」と「N+A 主述関係」が加えられている。前者は、「腔子（体内の空虚な所）、腰子（腎臓の俗語）」のように、名詞性の前語基と接尾語基が結合してできたもので、後者は、宣教師資料に「腹痛」の1語だけ出ている。以下では、日中間で比率のギャップが比較的大きい3種の語構成パターンに絞って、詳しく検証していきたい。

2.1 連体修飾関係の二字語

宣教師資料の二字語で、全語数の7割以上を占める名詞の内訳を見ると、連体修飾関係の3タイプ（N+N型、V+N型、A+N型）が名詞を支える三本柱となっていることがわかる。3タイプの比率を合計すると、宣教師資料では73.0%、蘭学資料では73.7%になるので、連体修飾関係の語が日中間でほぼ同様な比率を占めていることがわかる。しかし、N+N型、V+N型、A+N型の3タイプを別々に見ると、日中間の相違が浮き彫りになる。

例えば、宣教師資料では、N+N連体修飾関係の二字語が全語数の約半数に当たる48.4%を占めているが、蘭学資料における同型の35.5%と比較すれば、比率の差がよくわかる。一方、蘭学資料では、V+N型とA+N型がそれぞれ全語数の20.8%と17.4%を占めているのに対し、宣教師資料では、同型の語が12.8%と11.8%となっている（表2）。つまり、連体修飾関係の3タイプにおいて、宣教師資料ではN+N型の比率が高いのに対して、蘭学資料では逆にV+N型とA+N型の比率が高くなっていることが指摘できる。宣教師資料にある連体修飾関係の二字語を、N+N型、V+N型、A+N型のタイプ別に例示すると、次のようになる。

(N+N)	火器	火車	公使	公費	国書	国政	骨髓	骨節	上等	上品	水車
	水利	地形	地軸	電灯	電線	内耳	内地	日影	日用	脳海	筋
(V+N)	遺産	遺跡	回声	回路	活字	活物	学院	学術	教師	教場	交角
	交骨	食管	成案	成約	属国	属地	動脈	動力	病氣	病者	用意
(A+N)	黄疸	円体	温泉	佳品	危機	吉期	旧觀	堅質	現銀	純質	焦物
	壯年	倒経	等高	晩年	平面	密率	盲目	幽門	幼年	良法	靈性

2.2 並列関係の二字語

宣教師資料では、V+V並列関係の二字語が全語数の4%しか占めていないのに対して、蘭学資料の同型の語は7.5%となっている。日中間の差に注目して、なぜこの語数の少ないパターンで蘭学資料側の比率が高くなっているかを明らかにしたい。並列関係の二字語にはV+V型のほか、N+N型とA+A型もあるので、以下、一緒に取り上げる。

並列関係の二字語を調べてみると、3タイプ合計の95語には宣教師達の新造語が1語もなく、すべてが漢籍由来の在来語であることが判明した。しかも、その中の13語（13.7%）を除いて、ほかの82語（86.3%）はいずれも現代日本語の辞典に登録され、現在でも使用されているものである⁴。例えば、V+V型の66語で、現代日本語の辞典に収録されていないのは「搓擦、擦摩、消融、舒縮、抽搐、通融、然焼、燃点、摩揩、磨擦」の10語（15.2%）で、残りの56語（84.8%）は、次の通り、みな現代日本語の辞典に収録されているものである。

按摩	委任	格闘	干預	間隔	関係	感受	感傷	感触	感冒	教授	教習
駆逐	経営	経済	牽引	検索	研磨	工作	講習	購買	指摘	審判	釈放

⁴ 辞典での登録状況は、金田一京助他編『新明解国語辞典』（第五版）三省堂、および、松村明編『スーパー大辞林』（電子版）三省堂を使って確認した。

修復 循環 侵蝕 生育 成立 製造 選挙 戰爭 組織 措置 断続 知覚
 知識 注射 停滞 伝染 派遣 発行 発作 判決 判別 販売 沸騰 分散
 分析 分派 分裂 報復 膨脹 翻刻 翻訳 摩擦

N+N 型は計 23 語あるが、「形性、信息、瘡瘍」の 3 語 (13%) を除いて、次の 20 語 (87%) は現代日本語の辞典に収録されている。

価値 階級 刑罰 形式 形質 形状 形体 欠陥 憲章 工商 功用 才能
 証拠 将校 臓腑 都会 土壤 毛髪 螺旋 律法

A+A 型は「可能、簡便、簡明、全能、低下、野蛮」の 6 語だけで、いずれも現代日本語の辞典に収録されている。

一方、蘭学資料にも並列関係の二字漢語が 69 語見られる（詳しくは、朱京偉 2015 の表 1 と 3.3 節を参照）。このうち、漢籍に由來した在来語が 54 語 (78.3%) で、蘭学者達の新造語が 15 語 (21.7%) なので、宣教師資料と比較すれば、在来語の比率がやや下がって、新造語の比率が伸びているということになるが、8 割近くは漢籍からの在来語である。このように、並列関係のような語基と語基の組み合わせ（とくに V+V 型の組み合わせ）は日本人にとって難しいせいか、この種の日本漢語には漢籍から取り入れられたものが大半を占め、和製のものは限られていたようである。

2.3 述客関係の二字語

宣教師資料では、V+N 述客関係の二字語が全語数の 7.4% を占めており、蘭学資料の同型語の 2.3% と比べると、日中間の差が明らかである。V+N 述客関係の二字語は、「読 + 書、登 + 山」のような語順で構成されるもので、「本を読む、山登り」といった典型的な和語の語順とは逆になるから、日本語では受け入れられにくいでであろうか。

宣教師資料から抽出したこの種の 122 語について、現代日本語の辞典での収録状況を調べたところ、収録されているのが 85 語 (69.7%)、収録されていないのが 37 語 (30.3%) という結果を得た。つまり、和語の語順と異なるにもかかわらず、日本語には中国製の V+N 述客関係の二字語が少なからず存在している。前者には次のような語が見られる。

課税 過半 開国 改名 幹事 観劇 観戦 帰国 記事 汲水 決意 行軍
 航海 合法 合力 参政 滉痢 就学 就職 乗車 操業 対面 登場 納税
 破産 発狂 発源 負傷 赴任 復原 服薬 分類 分科 変質 哺乳 冒険
 命名 免税 立国 立法 立論

一方、後者に属する語は、日本語に同じ動詞性前語基 (V) を持つ V+N 述客関係の語が存在するかどうかによって、さらに、二つのグループに分けられる⁵。一つは、日本語に同じ動詞性前

⁵ V+N 述客関係の二字語では、動詞性の前語基 (V) が語の構造を左右する中心的な要素に当たる。

語基を持つ V+N 述客関係の二字漢語が存在するグループである。例えば、日本語に「加税」という語はないものの、前語基「加-」を持つ V+N 述客関係の二字漢語には「加速、加工、加齢」などが存在するので、「加税」を含め、「加-」を持つ V+N 述客関係の二字漢語が受容されたり生成されたりする可能性があると思われる。宣教師資料にある次の 26 語は、日本語にとって受容可能な V+N 述客関係の二字語になる。(カッコ内は、日本語に現存する、同じ動詞性前語基を持つ V+N 述客関係の二字漢語)

引熱 (←引火)	加税 (←加速)	化電 (←化膾)	還原 (←還元)
遣員 (←遣外)	失氣 (←失神)	借力 (←借金)	出境 (←出国)
就食 (←就職)	潤物 (←潤色)	爭權 (←爭霸)	造紙 (←造語)
派員 (←派兵)	防雷 (←防水)	漏税 (←漏水)	
鍍銀, 鍍銅 (←鍍金)	罷市, 罷兵 (←罷工)	立說, 立約 (←立法)	減火, 減血 (←減稅)
用計, 用力, 用武 (←用兵)			

もう一つは、日本語に同じ動詞性前語基を持つ V+N 述客関係の二字漢語が存在しないグループである。例えば、中国語では、「限-」(制限する) が他動詞性の語基なので、「限量」という語は「分量を制限する」の意を持つ V+N 述客関係の二字語として成り立つが、日本語では、「限界(限られた境界)、限度(限られた度合い)」などの V+N 構造の漢語を見ると、いずれも V+N 連体修飾関係の語となっていて、前語基「限-」を持つ V+N 述客関係の二字漢語として造られた実例が見当たらない。もう一例を挙げよう。中国語では、「絵-」(描く) が他動詞性の語基なので、「絵図」という語は、「図を描く」の意を持つ V+N 述客関係の二字語になる。これに対し、日本語では、「絵-」(え) に名詞の用法しかないので、「絵図」は V+N 述客関係の二字漢語にはなれない。「絵図」だけでなく、日本語では、「絵-」を前語基に持つ V+N 述客関係の二字漢語を造ることができない。以上の 2 語に加え、宣教師資料にある「限期、射熱、取銀、取票、傷風、生根、定向、附電、摩電」などの 9 語も、主として、動詞性前語基 (V) における目中間のずれ (品詞性・動詞の自他・意味) があるため、日本語にとって受容困難な V+N 述客関係の二字語である。

以上をまとめると、受容済みの 85 語と受容可能の 26 語を合わせれば、全 122 語の約 9 割を占めている。つまり、V+N 述客関係は、中国語式の統語構造とはいえ、漢文訓読の「返り読み」に馴染んできた日本人にとって、和語は O+V 構造、漢語は V+O 構造という一種の固定観念がすでにできているため、一定条件の下で、日本語に受け入れられる可能性が十分あると思われる。

3. 前語基と後語基の造語力

日本語の二字漢語にせよ、中国語の二字語にせよ、二つの一字語基（接辞性のものを含む）が結合して造られるのが普通である。一字語基には、前語基と後語基の両方になれるものや片方だけになれるものがあるため、「学会、学期、学術、…／医学、独学、留学、…」のように、前語基と後語基両方の造語状況を把握した上で造語力を考える必要がある。小論（2015）で、蘭学資料の二字漢語を前語基と後語基に区分して、それぞれの造語状況をまとめた（朱京偉 2015 の第

4節を参照)。ここでは、蘭学資料のときと同様の方法を使って、宣教師資料では、どのような一字語基が二字語の構成によく用いられたか、蘭学資料の二字漢語との間にどのような共通点と相違点が見られるかといった問題を明らかにしたい。

3.1 平均造語数の少ない前語基

まず、前語基の造語状況を見てみよう。表3の「造語数」の欄では、個々の前語基で構成された二字語の語数を調べ、その結果に即して幾つかの区間を設けている⁶。「語基数」の欄では、全1653語から重複の前語基を除いて異なりで701語基に整理した上、「造語数」の各区間に対応する語基数を記入した。

表3 宣教師資料の二字語における前語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
25–20	2	電 (- 学, - 気, - 機, - 化, - 光, - 信, - 池, - 燈, - 報, - 力), 地 (- 界, - 球, - 形, - 産, - 震, - 平, - 面, - 雷, - 理, - 力)
19–10	16	水 (- 車, - 兵, - 力), 定 (- 期, - 理, - 率), 脳 (- 核, - 筋, - 胞), 内 (- 地, - 部, - 服), 外 (- 科, - 界, - 部), 原 (- 稿, - 告, - 人), 骨 (- 格, - 髓, - 盤), 血 (- 液, - 管, - 脈), 国 (- 会, - 界, - 法), 人 (- 材, - 事, - 力), 中 (- 等, - 年, - 流), 公 (- 庫, - 法, - 理), 鉄 (- 器, - 道, - 路), 上 (- 行, - 層, - 品), 用 (- 意, - 兵, - 法), 自 (- 殺, - 主, - 由)
9–5	68	分 (- 化), 火 (- 車), 热 (- 帶), 日 (- 光), 推 (- 測), 下 (- 部), 気 (- 管), 入 (- 港), 生 (- 根), 天 (- 然), 物 (- 産), 吸 (- 入), 重 (- 点), 病 (- 毒), 成 (- 分), 動 (- 力), 耳 (- 垢), 肺 (- 胞), 肝 (- 病), 海 (- 防), 交 (- 際), 教 (- 化), 胃 (- 病), 心 (- 房), 星 (- 球), 眼 (- 鏡), 薬 (- 品), 雜 (- 費), 常 (- 度), 大 (- 腸), 過 (- 半), 活 (- 板), 肌 (- 筋), など
4–2	228	白 (- 糖), 本 (- 能), 腸 (- 病), 胆 (- 管), 毒 (- 物), 汗 (- 孔), 回 (- 路), 貨 (- 物), 筋 (- 帶), 決 (- 勝), 軍 (- 費), 陸 (- 軍), 輪 (- 軸), 脈 (- 動), 半 (- 径), 不 (- 法), 財 (- 産), 参 (- 観), 出 (- 力), 垂 (- 線), 磁 (- 気), 単 (- 式), 第 (- 二), 鍛 (- 金), 断 (- 定), 反 (- 比), など
1	387	按 (- 摩), 暗 (- 室), 凹 (- 鏡), 差 (- 角), 査 (- 定), 才 (- 能), 材 (- 質), 産 (- 業), 乘 (- 車), 操 (- 業), 側 (- 面), 担 (- 保), 背 (- 骨), 版 (- 図), 比 (- 例), 被 (- 告), 備 (- 員), 標 (- 高), 別 (- 称), 編 (- 者), 便 (- 秘), 哺 (- 乳), 補 (- 劑), 報 (- 復), など
(1653)	701	(1語基あたりの平均造語数は約2.36語になる)

表3によると、前語基として最も多用されていたのは「電-」と「地-」で、「水-, 定-, 脳-」などの16語基がこれに続いている。一方、造語数の減少に反して、対応する語基数が逆に急増する様相を見せている。もし、全701種の前語基を、造語数5語以上と造語数4語以下の二つのグループに分けるとすれば、前者は86語基(12.3%)なのに対して、後者は615語基(87.7%)となる。造語数の多い前語基が全体に占める比率が低いため、1語当たりの平均造語数は2.36語にとどまっている。ただし、蘭学資料の二字漢語では、造語数5語以上の前語基が5.9%，造語数4語以下の前語基が94.1%を占め、前語基の1語当たりの平均造語数が1.86語となっている。

⁶ 例えば、「25–20」は、同欄にある前語基で構成された二字語の語数は25語から20語までの区間に属することを意味する。

ので（朱京偉 2015 の第 4 節を参照），日中の比較をすると，前語基の造語数では宣教師資料の二字語がややリードしているということになる。

3.2 平均造語数やや高めの後語基

前語基に続き，ここでは，後語基の造語力を見てみよう。前語基と同様の方法で二字語の後語基に関するデータを表 4 にまとめた。

表 4 宣教師資料の二字語における後語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
69–39	4	質（金-, 堅-, 健-, 合-, 骨-, 浮-, 木-, 流-），力（火-, 権-, 合-, 借-, 能-, 風-, 目-, 和-），性（記-, 固-, 天-, 熱-, 品-, 賦-, 理-, 两-），体（球-, 国-, 実-, 人-, 政-, 天-, 肉-, 裸-）
36–20	5	物（活-, 財-, 動-, 腐-），骨（額-, 脚-, 頸-, 脆-），氣（空-, 磁-, 暖-, 病-），化（教-, 電-, 風-, 分-），線（曲-, 経-, 垂-, 直-）
19–10	22	学（入-, 理-），法（公-, 国-），員（派-, 幅-），定（改-, 断-），管（氣-, 脈-），用（常-, 服-），電（微-, 放-），期（定-, 日-），權（国-, 主-），動（運-, 流-），度（角-, 高-），会（国-, 入-），面（側-, 地-），器（機-, 電-），星（行-, 流-），形（地-, 定-），証（確-, 病-），点（定-, 力-），膜（耳-, 薄-），品（食-, 人-），税（納-, 免-），者（医-, 読-）
9–5	58	産（財-, 地-），道（軌-, 赤-），行（刊-, 発-），機（危-, 電-），成（結-, 合-），費（雜-, 資-），核（涙-, 軟-），界（限-, 地-），球（地-, 半-），炎（肝-, 肺-），病（狂-, 肺-），部（下-, 内-），極（電-, 南-），理（推-, 生-），料（顔-, 食-），角（差-, 鈍-），類（人-, 同-），流（下-, 支-），論（推-, 立-），率（速-, 定-），位（部-, 方-），業（營-, 產-），価（原-, 市-），科（児-, 内-），など
4–2	161	表（年-），差（光-），代（近-），島（群-），分（成-），官（鼻-），結（凍-），射（注-），擦（摩-），等（上-），格（骨-），和（調-），見（偏-），覺（動-），精（酒-），徑（直-），庫（国-），利（水-），囊（腎-），腦（小-），党（同-），額（税-），發（印-），服（口-），復（修-），感（觀-），閥（機-），など
1	247	池（電-），充（括-），出（引-），触（感-），存（現-），錯（交-），彈（砲-），得（所-），訂（改-），端（極-），放（积-），膚（皮-），稿（原-），許（特-），貨（雜-），級（階-），記（日-），跡（遺-），済（經-），艦（戰-），晶（水-），節（骨-），裂（分-），買（購-），壳（販-），蛮（野-），留（遺-），など
(1653)	497	(1語基あたりの平均造語数は約 3.33 語になる)

表 4 によると，後語基では，重複のものを除くと，異なりで 497 語基になる。これを造語数 5 語以上と造語数 4 語以下の二つのグループに振り分けると，前者は 89 語基（17.9%）で，後者は 408 語基（82.1%）となる。前語基に比べ，造語数の多い後語基がいくらか比率を伸ばしたことで，後語基の 1 語当たりの平均造語数は 3.33 語に高められている。ただし，蘭学資料の二字漢語では，後語基の 1 語当たりの平均造語数が 3.31 語なので，日中双方の差が殆どないと言って差し支えない。要するに，蘭学資料の二字漢語では，前語基の平均造語数（1.86 語）と後語基の平均造語数（3.31 語）の間に大きめの開きがあることから，語構成における後語基の中心的役割に注目が集まるのだが，宣教師資料では，前語基と後語基の平均造語数（2.36 語／3.33 語）にそれほどの差が見られず，前語基と後語基がさほど偏りなく機能していると言えよう。

3.3 造語数に関する日中対照

日中双方の同形語基が造語力の面でどのように違うかを調べるために、宣教師資料の二字語で造語数10語以上の前語基（18種）と後語基（31種）を取り上げ、これに対応する蘭学資料の同形語基と比較してみる。（表中の「宣」と「蘭」は宣教師資料と蘭学資料の略称、カッコ内の数字は二字語の語数）

表5 前語基と後語基の造語数に関する日中対照

造語数	前語基		後語基	
	語基数	宣と蘭の造語数	語基数	宣と蘭の造語数
69–39	0		4	質（宣69／蘭44）、力（宣53／蘭23）、性（宣41／蘭44）、体（宣39／蘭33）
36–20	2	電（宣25／蘭0）、地（宣20／蘭5）	5	物（宣36／蘭5）、骨（宣31／蘭9）、気（宣25／蘭9）、化（宣21／蘭10）、線（宣20／蘭20）
19–10	16	水（宣19／蘭7）、定（宣17／蘭4）、脳（宣17／蘭2）、内（宣17／蘭6）、外（宣17／蘭5）、原（宣16／蘭3）、骨（宣13／蘭2）、血（宣13／蘭2）、国（宣12／蘭0）、人（宣12／蘭0）、中（宣12／蘭4）、公（宣11／蘭0）、鉄（宣11／蘭1）、上（宣10／蘭2）、用（宣10／蘭0）、自（宣10／蘭2）	22	学（宣19／蘭1）、法（宣18／蘭3）、員（宣16／蘭0）、定（宣15／蘭8）、管（宣14／蘭5）、用（宣14／蘭5）、電（宣13／蘭0）、期（宣12／蘭10）、権（宣12／蘭0）、動（宣11／蘭12）、度（宣11／蘭15）、会（宣11／蘭1）、面（宣11／蘭7）、器（宣11／蘭4）、星（宣11／蘭9）、形（宣11／蘭3）、証（宣11／蘭6）、点（宣11／蘭21）、膜（宣10／蘭10）、品（宣10／蘭5）、税（宣10／蘭0）、者（宣10／蘭1）

結論を先に述べると、宣教師資料で造語数の多い語基が蘭学資料でも造語数の多い語基になれるかというと、必ずしもそうではない。実際には、蘭学資料での造語数が4語以下になるものが調査対象の半数を占めている。

この傾向は、とくに前語基で著しく現れている。表5に示した通り、宣教師資料で造語数10語以上の前語基18種に対して、蘭学資料の同形語基では、造語数5語以上のものが4種（22.2%）しかなく、造語数4語以下のものが14種（77.8%）に達している。一方、後語基では、「質（宣69／蘭44）、力（宣53／蘭23）、性（宣41／蘭44）、体（宣39／蘭33）」のように、日中双方の同形語基がともに造語数の多い語基となるものもあれば、「線（宣20／蘭20）、膜（宣10／蘭10）」のように、日中双方が同語数であったり、「動（宣11／蘭12）、度（宣11／蘭15）、点（宣11／蘭21）」のように、蘭学資料の造語数が逆に宣教師資料のそれを上回ったりするものも見られる。そのため、宣教師資料で造語数10語以上の後語基31種に対して、蘭学資料の同形語基では、造語数5語以上のものが21種（67.7%）、造語数4語以下のものが10種（32.3%）にとどまっている。前語基の状況とは明らかに異なる。

つまり、日中双方の前語基では、造語数の多いか少ないかが一定せず、相反する傾向さえ見られるが、後語基では、造語数が多ければ多いほど、日中間の一致度が高くなっている。造語数における同じ傾向が見られるものが大半を占めている。ちなみに、前掲の「-質、-力、-性、-体」など、日中双方で造語数が最上位にあるものは日中の現代語に受け継がれて、二字語だけでなく、

三字語の造語にも生かされている。

4. 出自から見る二字語の性格

出自の違いによって二字語を分類すると、どれが漢籍に由來した在来語で、どれが宣教師達による新造語かが見えてくるので、宣教師用語の性質をとらえるには不可欠な作業である。

4.1 語源の調査と分類

二字語の語源を調べるにあたって、中国歴代の典籍 3500 種を収録した《四庫全書》(1781 頃成立)の電子版を用いた。具体的には、宣教師資料で抽出した二字語を《四庫全書》(電子版)で逐語検索し、用例の性質を判断した上で、「出典あり」「新義あり」「出典なし」の 3 種類に振り分ける。基本的には、《四庫全書》で古い漢籍の用例が見付かれば、「出典あり」の語と見なし、漢籍から取り入れられた在来語になる。もし、古い漢籍に用例があるものの、宣教師資料で顕著な意味変化が発生した場合は、「新義あり」の語として類別しておく。これに対して、《四庫全書》の検索で用例が得られない場合は、「出典なし」の語として扱い、宣教師達によって造られた新造語の可能性が高いものと推測される。この 3 種類の語が各文献で偏りなく分布しているかどうかを見るために、文献別に各種の語を整理し、その結果を表 6 にまとめた。

表 6 宣教師資料の二字語の出自状況 (カッコ内は %)

資料名	出典あり	新義あり	出典なし	資料別合計
1853 《遐邇貫珍》麥都思編	276 (20.7)	1 (12.5)	33 (10.5)	310 (18.8)
1854 《博物新編》合信著	152 (11.4)	0	30 (9.6)	182 (11.0)
1857 《六合叢談》偉烈亞力編	403 (30.3)	2 (25.0)	30 (9.6)	435 (26.3)
1858 《内科新説》合信著	144 (10.8)	0	35 (11.2)	179 (10.8)
1864 《万国公法》丁韙良訳	45 (3.4)	2 (25.0)	8 (2.6)	55 (3.3)
1868 《格物入門》丁韙良著	67 (5.0)	2 (25.0)	35 (11.2)	104 (6.3)
1876 《格物探原》韋廉臣著	41 (3.1)	0	13 (4.2)	54 (3.3)
1887 《電学須知》傅蘭雅著	18 (1.3)	1 (12.5)	27 (8.6)	46 (2.8)
1890 《西国天学源流》王韜訳	20 (1.5)	0	2 (0.6)	22 (1.3)
1890 《重學淺說》王韜訳	37 (2.8)	0	17 (5.4)	54 (3.3)
1894 《全体須知》傅蘭雅著	83 (6.2)	0	56 (17.9)	139 (8.4)
1896 《格致質学啓蒙》艾約瑟著	16 (1.2)	0	11 (3.5)	27 (1.6)
1896 《身理啓蒙》艾約瑟著	30 (2.3)	0	16 (5.1)	46 (2.8)
出典有無の合計	1332 (80.6)	8 (0.5)	313 (18.9)	1653 (100)
蘭学資料での比率	511 (67.7)	23 (3.0)	221 (29.3)	755 (100)

表 6 によると、宣教師資料の二字語では、漢籍に出典を持つ「出典あり」の語が全抽出語の 80.6% を占め、圧倒的に多いが、漢籍と異なる意味に転用された「新義あり」の語がわずか 0.5% しかなく、漢籍に出典を持たない「出典なし」の語が 18.9% とやや低めの数値にとどまっている。蘭学資料の二字漢語と比較すると、「出典あり」の語の比率が蘭学資料の同類語を大きく上回つ

ているのに対し、「新義あり」の語と「出典なし」の語の比率が、蘭学資料の同類語に比べて、著しく低下している。つまり、宣教師資料では、漢籍由来の在来語が多用されているものの、新語の創出に関しては、蘭学資料に見られる積極的な新語創出に及ばないことが推測される。

また、表6の「資料別合計」欄では総語数に占める各資料の異なり語数とその比率を示しているが、この比率と比較することで、「出典あり」「新義あり」「出典なし」という3種類の語の分布に偏りがあるかどうかを把握することができる。例えば、『遐邇貫珍』(1853)の抽出語が総語数の18.8%を占めているが、「出典あり」の語はそれを上回って20.7%となっているので、同書の総語数に占める比率以上に漢籍由来の在来語が多用されているということになる。

ちなみに、各資料の総語数に占める比率を超えた部分については、網掛けで表示しているが、これによって、「出典あり」の語が多用される現象が前半の資料に傾いており、後半の資料になると、「出典なし」の語が多用される傾向が強くなるという大きな流れが読み取れる。この点において、蘭学資料の二字漢語もほぼ同様の傾向を見せている(朱京偉2015の5.1にある表4を参照)。

4.2 「出典あり」と「出典なし」の二字語

第3節において、個々の前語基と後語基で構成された二字語の語数を調べて、造語数の多い順にランク分けをした(表3と表4)。ここでは、造語数10語以上の前語基(計18種)と後語基(計31種)によって構成された二字語を「出典あり」の在来語と「出典なし」の新造語に二分して、両者間の関わり方(棲み分け)に着目してみる。(カッコ内は語数)

表7 前語基で見る「出典あり」と「出典なし」の語の棲み分け

前語基	「出典あり」の語例(在来語)	「出典なし」の語例(新造語)
電 - (25)	電光、電信、電線、電燈(4)	電化、電気、電機、電池、電報、電力…(21)
地 - (20)	地球、地產、地動、地平、地面、地雷、地理…(20)	(0)
水 - (19)	水質、水車、水手、水性、水族、水体、水力…(18)	水雷(1)
定 - (17)	定価、定額、定期、定議、定形、定法、定理…(16)	定点(1)
脳 - (17)	脳海、脳氣、脳橋、脳筋、脳髄、脳体、脳病(7)	脳核、脳炎、脳結、脳胞、脳質、脳部…(10)
内 - (17)	内科、内耳、内地、内部、内服、内包、内容…(17)	(0)
外 - (17)	外界、外耳、外傷、外皮、外部、外力、外用…(17)	(0)
原 - (16)	原因、原価、原稿、原告、原文、原本、原理…(10)	原権、原行、原質、原人、原性、原力(6)
骨 - (13)	骨格、骨質、骨錐、骨髄、骨節、骨体(6)	骨衣、骨架、骨環、骨支、骨盤、骨盆…(7)
血 - (13)	血液、血行、血糸、血質、血道、血崩、脈…(11)	血管、血輪(2)
国 - (12)	国境、国庫、国權、国書、国体、国土、国法…(10)	国会、国債(2)
人 - (12)	人員、人材、人事、人性、人体、人力、人類…(12)	(0)
中 - (12)	中軸、中点、中等、中年、中風、中流、中和…(10)	中耳、中脳(2)
公 - (11)	公会、公局、公使、公判、公費、公法、公理…(10)	公司(1)
鉄 - (11)	鉄器、鉄鍵、鉄鉱、鉄質、鉄杵、鉄線、鉄撥(7)	鉄軌、鉄性、鉄道、鉄路(4)
上 - (10)	上音、上行、上昇、上訴、上層、上等、上品…(10)	(0)
用 - (10)	用意、用字、用物、用兵、用法、用武、用力…(9)	用紙(1)
自 - (10)	自覺、自主、自習、自動、自由、自用、自立…(10)	(0)

表7によると、造語数10語以上の前語基では、在来語が圧倒的多数を占める場合がかなり多い。例えば、「地-, 内-, 外-, 人-, 上-, 自-」といった前語基では、新造語が1語も現れず、在来語一色となっている。また、「水-, 定-, 公-, 用-」では、新造語がわずか1語だけにとどまっている。これに対して、新造語の語数が在来語を上回る前語基として、「電-（在4/新21）、脳-（在7/新10）、骨-（在6/新7）」の3語基が挙げられる⁷。このように、宣教師達は、漢籍由来の在来語を取り入れたと同時に、西洋から伝わった電気学や医学をはじめ、専門用語の不足する分野で、在来語の語構成パターンに倣い、多くの新語を造り出していた。

表8 後語基で見る「出典あり」と「出典なし」の語の棲み分け

後語基	「出典あり」の語例（在来語）	「出典なし」の語例（新造語）
-質 (69)	気質, 材質, 地質, 定質, 変質, 本質, 流質… (47)	牙質, 原質, 雜質, 実質, 電質, 壁質… (22)
-力 (53)	火力, 合力, 借力, 出力, 地力, 風力, 兵力… (25)	圧力, 吸力, 阻力, 張力, 抵力, 伝力… (28)
-性 (40)	悪性, 記性, 成性, 品性, 賦性, 理性, 靈性… (28)	堅性, 酵性, 脆性, 暖性, 電性, 肉性… (12)
-体 (39)	国体, 人体, 地体, 定体, 肉体, 本体, 裸体… (31)	胃体, 肝体, 橋体, 筒体, 肺体, 氷体… (8)
-物 (36)	貨物, 玩物, 器物, 実物, 食物, 人物, 生物… (36)	(0)
-骨 (31)	胸骨, 頸骨, 指骨, 舌骨, 手骨, 掌骨, 眉骨… (26)	捲骨, 鈎骨, 鎖骨, 砧骨, 鐙骨 (5)
-気 (24)	外気, 空気, 生気, 暖気, 毒気, 病気, 風気… (18)	軽気, 磁気, 硝気, 淡気, 炭気, 電気 (6)
-化 (21)	感化, 教化, 消化, 調化, 同化, 風化, 分化… (17)	搾化, 察化, 雜化, 電化 (4)
-線 (20)	経線, 弧線, 垂線, 截線, 直線, 点線, 螺線… (17)	陰線, 肌線, 脳線 (3)
-学 (18)	算学, 社学, 就学, 数学, 天学, 入学, 理学… (15)	化学, 光学, 電学 (3)
-法 (18)	行法, 公法, 合法, 国法, 性法, 治法, 薬法… (17)	海法 (1)
-員 (16)	委員, 人員, 属員, 派員, 備員, 武員, 幅員… (13)	院員, 遣員, 隨員 (3)
-定 (15)	改定, 判定, 査定, 推定, 測定, 斷定, 認定… (14)	任定 (1)
-管 (14)	肝管, 気管, 食管, 声管, 總管, 銅管, 涕管 (7)	液管, 汗管, 吸管, 血管, 胆管, 潑管, 脈管 (7)
-用 (14)	兼用, 雇用, 功用, 国用, 常用, 食用, 服用… (14)	(0)
-電 (13)	微電 (1)	陰電, 化電, 乾電, 蓄電, 負電, 放電… (12)
-期 (12)	会期, 後期, 時期, 定期, 日期, 年期, 予期… (11)	車期 (1)
-権 (12)	君権, 国権, 私権, 主権, 専権, 全権, 争権… (9)	越権, 原権, 物権 (3)
-動 (11)	活動, 吸動, 自動, 摂動, 地動, 脈動, 流動… (9)	能動, 平動 (2)
-度 (11)	緯度, 過度, 角度, 距度, 高度, 常度, 態度… (9)	折度, 熱度 (2)
-会 (11)	公会, 照会, 総会, 都会, 入会 (5)	議会, 教会, 国会, 商会, 全会, 民会 (6)
-面 (11)	海面, 球面, 局面, 水面, 側面, 地面, 凸面… (9)	斜面, 平面 (2)
-器 (11)	火器, 楽器, 機器, 儀器, 金器, 原器, 測器… (9)	電器, 繁器 (2)
-星 (11)	火星, 客星, 羯星, 経星, 行星, 恒星, 流星… (11)	(0)
-形 (11)	気形, 堅形, 鼓形, 針形, 地形, 定形, 囊形… (9)	篩形, 条形 (2)
-証 (11)	印証, 確証, 虚証, 狂証, 痾証, 熱証, 病証… (9)	炎証, 眼証 (2)
-点 (10)	交点, 中点, 燃点 (3)	界点, 倚点, 極点, 質点, 重点, 定点, 力点 (7)
-膜 (10)	隔膜, 脊膜, 耳膜, 薄膜, 皮膜, 胞膜, 網膜 (7)	胰膜, 垂膜, 節膜 (3)
-品 (10)	佳品, 金品, 上品, 食品, 人品, 凡品, 藥品… (9)	質品 (1)
-税 (10)	加税, 課税, 貨税, 減税, 徵税, 免税, 漏税… (10)	(0)
-者 (10)	医者, 学者, 患者, 観者, 作者, 讀者, 編者… (10)	(0)

⁷ 文中の（在4/新21）などは在来語の語数と新造語の語数を表す。以下同じ。

表8でわかるように、前語基に比べ、造語数10語以上の後語基によって構成された二字語が全般的に多くなっている。これに伴って、新造語の語数もそれなりに増えているが、在来語の語構成パターンを踏襲しながら、その延長線上で新語が造り出されるという構図が保たれている。例えば、在来語一色で新造語が1語もない「-物、-用、-星、-税、-者」があるほか、新造語が1語だけの「-法、-定、-期、-品」も見られる。これらの後語基では、宣教師達が主に在来語を受け継ぐ方式を探っていた。これに対して、「-力（在25／新28）、-電（在1／新12）、-会（在5／新6）、-点（在3／新7）」では、新造語の語数が在来語を上回っている。また、在来語の語数には及ばないが、「-質（在47／新22）、-性（在28／新12）、-体（在31／新8）、-気（在18／新6）、-管（在7／新7）」など後語基でも相当数の新造語が現れている。これらの後語基では、宣教師達が在来語の語構成パターンに倣い、多くの新造語を創出していた。

一方、小論（2015）で取り上げた蘭学資料の二字漢語では、造語数10語以上の後語基が全15語基ある中で、新造語の語数が在来語を上回っているのは「-点（在4／新17）、-力（在8／新15）、-素（在0／新13）」の3語基である。また、在来語の語数には及ばないが、相当数の新造語が見られたものに「-性（在25／新19）、-質（在24／新20）、-体（在26／新7）、-線（在13／新7）、-液（在12／新6）」などがある（朱京偉2015の5.2にある表5を参照）。つまり、蘭学資料と宣教師資料では、新語が多く造られた後語基はある程度一致していることが指摘できよう。

4.3 「新義あり」の二字語

漢籍に由來したものの、漢籍本来の意味から離れ、現代中国語と一致する意味に転用されたものをさす。宣教師資料では、この種の語として「金属、真空、民主、特權、下院、出口、入口、花眼」の8語が挙げられる。ただし、「金属、真空」の2語は、宣教師資料と蘭学資料の双方に見られる日中共通の二字語に属するため、次節で述べることにする。以下では残りの6語を取り上げるが、このうち、「民主、特權、下院」は、宣教師資料で意味変化が起きた後、日本語にも影響を及ぼしたもので、「出口、入口、花眼」は、その意味変化が中国語内部に止まり、日本語との関わりがなかったものである。

4.3.1 「民主」について

「民主」は昔の漢籍に見られ、庶民の主を意味する語であった。例えば、《三国志・呉志》（280頃）には“僕為民主，当以法率天下，何得寢公憲而從君邪”〈卷15〉（僕は庶民の主であるため、法を以って天下を統率すべきで、なぜ公の法律を破って君に従うのか）という例が見られる。しかし、宣教師資料にある「民主」の用例は漢籍本来の意味から離れている。例えば、《万国公法》（1864）には“蓋無論其国系君主之，系民主之，無論其君權之有限無限者，皆借君以代國也。”〈第1卷第2章第4節〉（蓋しその国は君が之を主るか民が之を主るかにせよ、その君の権力が有限か無限かにせよ、君を借りて国を代表するのが普通だ）とある。ここでは、漢文の文法に従えば、文中の「君主」と「民主」は語構造ではなく、句構造として理解すべきであろう。

ただし、同書には“在君主之國，無論其權之有限無限，通使之事大抵歸國君定奪。在民主之國，或系首領執掌，或系國會執掌，或系首領國會合行執掌。”〈第3卷第1章第4節〉（君主の国では、その権力の有限か無限かを問わず、使者を通わせる事は大抵國君が決定する。民主の国では、首領が責任を持つか、或いは国会が責任を持つか、或いは首領と国会が合わせて責任を持つかになる）という一節が見られるが、この用例では、「民主」は語構造としか考えられない。《万国公法》の用例は、まさに「民主」が近代以降の新義に切り替わろうとする頃の状況を表しているように思われる。

4.3.2 「特權」について

「特權」は、漢籍において「特別に配慮する」の意を持つ句構造となるのが普通であった。例えば、《読礼通考》（17世紀後半）には“聖人特權輕重而行之，而其心豈安於是乎。”〈卷112〉（聖人は特に軽重を吟味して行動するが、その心はこれに甘んじるわけではない）とある。また、元・劉墣撰《雲水村稿》（13世紀末）には“可特權四川宣撫使，陝西河東路招撫使，召集義士誅戮叛臣”〈卷7〉（四川の宣撫使や陝西の河東路招撫使に権限を特別に与え、義士を召集して叛乱の役人を鎮めるべきだ）とあるように、現代語の意味合いに近づいた用例も稀ながら見られる。

時代が下って、宣教師資料になると、現代語と一致する「特別の権利」の意に転用された用例が見え始める。例えば、《万国公法》（1864）には“凡自主之国相待，操權有二，曰自有之原權，曰偶有之特權。……若自主之国相待，因事而得權，此所謂偶有之特權。”〈第2卷第1章第1節〉（……もし主権国の交際上、ある事柄に因んで権力を得た場合、これはいわゆる偶に有る特権という）とあるのがそれに当たる。

4.3.3 「下院」について

漢籍に見える「下院」は、「寺院の本部に所属する分院」の意味を表していた。例えば、宋・徐夢莘撰《三朝北盟会編》（12世紀後半）には“令於林中尋之，得三僧二僧童，云是台州壽聖院之下院也。”〈卷136〉（森の中で探してもらったところ、三人の僧侶と二人の小僧を得て、台州壽聖院の下院だと云う）とある。しかし、19世紀後半の宣教師資料では、「下院」は漢籍本来の意味から離れ、「上院」とともに、国会の両院、すなわち参議院と衆議院を表す語に転用される。例えば、《六合叢談》（1857）には“倫敦等處巨商，各於其地集議，以下院所論為不然。”〈1卷5号、慕維廉・永遠説〉（ロンドンなどの巨商は、それぞれ地元に集まり、下院での議論がとんでもない話だと話し合った）とあるのは早期の用例に当たる。

4.3.4 「出口、入口」について

漢籍では、「出口」は主として「口を開いて話すこと」を意味する。例えば、漢・劉向編《説苑》（紀元前17頃）には“為善者得道，為惡者失道。惡語不出口，苟言不留耳”〈卷16〉（善なる者は道を得て、惡なる者は道を失う。惡言は口から出ず、軽率な話は耳に残さない）とある。これに対して、「入口」は「口に入れて食べること」の意を表していた。例えば、宋・程顥ら撰《二程遺書》（11

世紀後半)には“曾子執親之喪, 水漿不入口者七日。”〈卷 18〉(曾子は親の喪を執り行なうに当たって, 水や汁を口に入れずに七日間過ごした)とある。

アヘン戦争以後, 中国が諸外国との通商を強いられ, 沿海と内地の港を外国船に開放していく中で, 「出口」と「入口」はペアの語となり, 外国船が「港を出ること」と「港に入ること」の意味に転用されるようになる。例えば, 《六合叢談》には“進口之米亦然, 售物加税百分之三, 出口之貨無税。英船入口, 火砲兵械, 尽交之官, 回則給還。”〈華英通商事略〉(港に入る米もまた同じで, 売り出すと 3 パーセントの税が加えられるが, 港を出る貨物は免税になる。イギリスの船が港に入ると, 火砲や兵器は近く役所に納めておき, 帰国する時にまた返還される)という用例が見られる。当時, 宣教師資料には「出口, 入口」とともに「輸出, 輸入」も使われていたが, 後者の 2 語が日本語に定着したのに対し, 前者の「出口, 入口」は受容されずに終わった。

4.3.5 「花眼」について

漢籍では, 「異性に秋波を送る目つき」の意味に使われていた。例えば, 明・董説編《西遊補》(17世紀後半)には“臨去, 只把眼兒亂轉, 丈夫也做個花眼送他”〈第 5 回〉(女が出ていく前, 色目でじろじろ見回していて, 夫も彼女に秋波を送った)とあるのは代表的な例と言える。宣教師資料になると, 現代語と一致する「老眼」の意味に転用されるようになった。例えば, 《格物入門》(1868)には“故視物多昏, 近而益昏, 此花眼須以凸鏡補其不足也。”〈卷 3〉(物を視るときよく目まいをし, 近づけばますます目まいがひどくなる。この老眼は凸鏡でその不足を補う必要がある)という一節がある。ただし, 宣教師資料で起きた意味変化は, 現代中国語に受け継がれているだけで, 日本語とは無関係のものである。

5. 日中共通の二字語の性格

蘭学者達が在華宣教師の著訳書を参照しその用語を借用する歴史は, 先学達の論考によって明らかにされている(古田東朔 1963, 森岡健二 1969, 松井利彦 1979, 1980, 1983, 1985, 佐藤亨 1980, 1986, 荒川清秀 1997 を参照されたい)。しかし, 今回取り上げた 19 世紀後半の宣教師資料は, 19 世紀前半の蘭学資料よりも時期が遅れているため, 逆方向の語彙交流があったかどうかが気になる問題である。解決策として, 宣教師資料の二字語と蘭学資料の二字漢語を互いに照合し, 共通に見られる用語がどのくらいあるかを明らかにし, さらに双方の借用関係を検討していくという手順が必要であろう。これを踏まえ, 宣教師資料の二字語(1653 語)と蘭学資料の二字漢語(755 語)を照合した結果, 以下のようなデータを得た。

表 9 日中共通に見られる二字語の出自と位置付け(カッコ内は %)

本節の研究対象と位置付け	出典あり	新義あり	出典なし	合計
蘭学資料の二字漢語(朱京偉 2015)	511 (67.7)	23 (3.0)	221 (29.3)	755 (100)
宣教師資料の二字語(本稿第 4 節)	1332 (80.6)	8 (0.5)	313 (18.9)	1653 (100)
日中共通の二字語(本稿第 5 節)	159 (85.5)	2 (1.1)	25 (13.4)	186 (100)

表9によると、対象となった宣教師資料と蘭学資料において、日中共通の二字語は計186語となつておる、それぞれ、宣教師資料の二字語（1653語）の11.3%と蘭学資料の二字漢語（755語）の24.6%に相当する。その内訳を見ると、漢籍に由來した「出典あり」の語が85.5%を占め、圧倒的に多い。このほか、漢籍と異なる意味に転用された「新義あり」の語と、漢籍で出典を見出せない「出典なし」の語が、それぞれ1.1%と13.4%となっている。事実上、蘭学資料から宣教師資料への語彙借用があったかどうかの根拠は、この「新義あり」の語と「出典なし」の語に求めなければならない。以下では、「出典あり」「新義あり」「出典なし」という3分類に従つて検討していく。

5.1 日中共通の「出典あり」の語

宣教師資料と蘭学資料にともに見られ、しかも、古い漢籍に由來した語である。例えば、「重力」という語は、宣教師資料の《六合叢談》（1858、第1号）に“凡引重物上斜面、則所抵者有面阻力、又有体質之重力。”（凡そ重い物を斜面で引き上げるとなると、これに抵抗する力に、表面の阻力も有れば、物自身の重力も有る）とある。これに対して、蘭学資料の『曆象新書』（1798、上編上巻）には「地上目前なる動静を推し、重力の必然を窮て、拡充して高く天上に及し…」という一節が見られ、宣教師資料より60年も早い用例となる。しかし、《四庫全書》の電子版で検索してみると、カトリック宣教師の手による《奇器図説》（1627）には“如依其法、重力垂尽、復斡而上、則其行當无量也”（もしその方法に依れば、重力が垂れ尽すと、また、めぐり上っていくので、その動きはまさに無限のものだ）とある。このように、「重力」は、19世紀の宣教師資料と蘭学資料にともに見られるものの、その語源を追いかけると、時代のより早い漢籍に由來した「出典あり」の語であることが明らかになった。

このように、この種の語は、19世紀の蘭学資料と宣教師資料の間に借用関係が存在するよりも、日中双方が年代の古い漢籍から別々に取り入れたものが殆どだらうと思われる。また、語構成の視点で見ると、「出典あり」の語には、次のような後語基を持つ二字語が多く含まれていることに気付く。（カッコ内は語数）

－質 (16)	瓦質	器質	金質	凝質	形質	血質	骨質	水質	性質	体質
	地質	鉄質	土質	物質	本質	木質				
－体 (11)	球体	鏡体	光体	肢体	実体	静体	星体	地体	天体	物体
	本体									
－性 (10)	悪性	気性	形性	固性	水性	体性	動性	熱性	物性	薬性
－星 (5)	火星	経星	彗星	恒星	木星					
－線 (5)	曲線	弧線	垂線	中線	直線					
－度 (5)	過度	角度	距度	高度	常度					
－角 (3)	銳角	直角	鈍角							
－骨 (3)	胸骨	脛骨	脊骨							

- 点 (3) 交点 中点 燃点
- 部 (3) 外部 頭部 内部
- 力 (3) 火力 重力 能力

以上のほか、–化（溶化、融化）、–管（気管、涙管）、–酸（塩酸、酢酸）、–心（重心、地心）、–帶（寒帶、熱帶）、–品（食品、薬品）、–物（雑物、食物）、–膜（薄膜、網膜）、–面（球面、地面）、–用（外用、食用）などの後語基を持つ二字語も多数見られる。上掲の諸語には、天文・地理・医学・数学といった分野の専門語がかなり集中している点に着目し、《四庫全書》（電子版）で漢籍のジャンルを絞って検索してみると、日中共通の「出典あり」の語は、次のような書物に多用されていることが浮き彫りになる。おそらく、江戸期の蘭学者達はこの種の漢籍との関わりが特に深く、蘭書翻訳の際も隨時参照していただろうと想像される。

○天主教宣教師の漢訳洋学書

《乾坤体義》（利瑪竇撰⁸、1605）、《泰西水法》（徐光啓・熊三拔共訳⁹、1612）、《表度説》（熊三拔撰、1614）、《天問略》（陽瑪諾撰¹⁰、1615）、《職方外紀》（艾儒略增訳¹¹、1623）、《奇器図説》（鄧玉函口述¹²、王徵筆述、1627）

○歴代の漢方医学書

《肘後備急方》（晋・葛洪撰、3–4世紀）、《備急千金要方》（唐・孫思邈撰、652）、《銀海精微》（唐・孫思邈撰、682）、《医説》（南宋・張杲撰、1224）、《普濟方》（明・朱棣ら編、1406）、《証治準繩》（明・王肯堂撰、1602）、《神農本草經疏》（明・繆希雍編、1625）、《金匱要略論注》（清・徐彬撰、1671）

○天文・暦法・農書・礼書

《王氏農書》（元・王禎撰、1300頃）、《六經天文篇》（宋・王応麟撰、1340）、《農政全書》（明・徐光啓撰、1639）、《新法算書》（明・徐光啓ら撰、1645）、《格致鏡原》（清・陳元龍編、1735）、《欽定授時通考》（清・鄂爾泰ら編纂、1742）、《五礼通考》（清・秦蕙田撰、1761）

5.2 日中共通の「新義あり」の語

宣教師資料と蘭学資料にともに見られるが、漢籍本来の意味から離れ、現代語と一致する意味に転用されたものをさす。先の4.3において、宣教師資料のみに見られる6語を取り上げたが、ここでは、宣教師資料だけでなく、蘭学資料の同形語にも同様な意味変化が見られる「金属」と

⁸ 利瑪竇（1552–1610）はイタリア人宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci）の中国名。《乾坤体義》の出版は「西学東漸」の始まりだとも言われる。

⁹ 熊三拔（1575–1620）はイタリア人宣教師サバティーノ・デ・ウルシス（Sabatino de Ursis）の中国名。アゴスティーノ・ラメリ（Agostino Ramelli）の水利学の著書を中国語に翻訳し《泰西水法》の書名で出版した。

¹⁰ 陽瑪諾（1574–1659）はポルトガル人宣教師ディアズ（Emmanuel Diaz）の中国名。

¹¹ 艾儒略（1582–1649）はイタリア人宣教師アレニ（Jules Aleni）の中国名。《職方外紀》は全面的に西洋地理学を紹介し、中国の伝統的な地理観に大きな衝撃を与えた洋学書である。

¹² 鄧玉函（1576–1630）はドイツ人宣教師テレンツ（Jean Terrenz）の中国名。《奇器図説》では力学理論に基づいて作成された西欧の各種機械の構造が図解されている。

「真空」について詳しく検討する。

5.2.1 「金属」について

「金属」は、昔の漢籍に文字列が見えるが、語よりも句構造の用例が多かったように思われる。例えば、雜学の内容を集めた《演繁露》(宋・陳大昌撰、12世紀後半)には“太宗之謂黃銀者、其殆鑑石也、已鑑金属也、而附石為字者、為其不皆天然自生。”(太宗が「黃銀」と言っているのはその殆どが「鑑石」だ。「鑑」はすでに金に属するのに、「石」の字を附けたのはみんなが天然自生のものではないためだ)という一節がある。文中の「金属」は、現代語の感覚なら語と見てよさそうだが、古典中国語では「名詞(金) + 動詞(属)」の語順で成り立つ語がめったにならない、「金に属する」という意の句構造として解釈し得るものと思われる。

漢籍にある「金属」を句構造とする理由はもう一つ挙げられる。例えば、《周礼集説》(元・陳友仁、13世紀頃)には“肝主筋、肝木属也、故欲散。心主脈、心火属也、故欲軟。肺主氣、肺金属也、故欲堅。”(肝は筋を主り、木に属するものなので、ばらばらになろうとする。心は脈を主り、火に属するものなので、軟らかくなろうとする。肺は氣を主り、金に属するものなので、堅くなろうとする)のように、古代中国の「五行説」に基づいた説明が見られる。この例によって、漢籍では「金属」と並んで、「木属」「火属」「土属」などの文字列も存在していたことがわかる。事実上、こうした「五行説」に関わる「金属」が用例の大半を占めていたので、「金属」は「木属、火属、土属」に準じて句構造扱いにすべきであろう。

しかし、19世紀後半の宣教師資料になると、新しい意味に転用された用例が見え始める。例えば、《格物入門》(1868、卷4中章)には、“凡金属二者相合均能生電、惟有優劣之殊耳。”(全ての金属が二つ合うと、みな電気を起こすことができる、ただ優劣の差が有るのみだ)とある。また、《格物探原》(1876、首卷)には“草木之葉皆萎、凡金属皆鏽。”(草木の葉はみな萎え、全ての金属はみな錆びる)という用例が見られる。文中の「金属」は、「五行説」の「木属」「火属」などと関係なく、単独で、しかも、現代語の意味と一致する文脈に使われている。

一方、蘭学資料では、中国語から「金属」だけを取り入れ、名詞として定着させたのに対し、「木属」「火属」などに関しては、文字列すら見当たらない。例えば、『氣海觀瀾廣義』(1851、卷2)には、「然トモ亦嘗テ長索ニ金属ノ球ヲ繫キ、山ノ断崖上ヨリ谷中ニ垂下シテ、其向フ所ヲ驗セル者アリ」とあるが、文中の「金属」は明らかに名詞性の語として用いられている。

このように、宣教師資料に見える「金属」の意味変化は、蘭学資料からの影響を受けて実現したのか、それとも、時間の推移で中国語自体の変化によりもたらされたのか。在華宣教師が蘭学資料を参照した証拠が全くない現段階では、断言することができない。

5.2.2 「真空」について

「真空」は、漢籍に典拠を持ち、物的世界を超えた悟りの境地を意味する佛教語であった。例えば、宋・衛湜撰《礼記集説》(13世紀初期、卷123)には、“真空乃為得道、不知道只是人事之理耳。”(真空は乃ち道を得る為だ。道を知らないのはただ世間一般の理なのだ)とある。また、

清・王夫之《張子正蒙注》(17世紀後半, 太和篇)には“但見來無所從, 去無所帰, 遂謂性本真空, 天地皆緣幻立。”(…遂に, 性は本より真空であり, 天地はみな幻に縁って成り立つことをいう)という用例がある。この2例はともに漢籍における「真空」本来の意味を表している。しかし, 19世紀後半の宣教師資料になると, 例えば, 《電学須知》(1887, 第2章)には“(雷)発声之故, 因正負二電相合時, 暫成真空, 周囲空氣忽衝補其空, 則氣与氣触, 撃撞成声。”(雷が鳴るのは, プラスとマイナスの二つの電気が合う時, 暫く真空と成り, 周りの空気が急に押し寄せてきて其の空きを補うため, 気流と気流が衝突して音と成る)とあるように, 漢籍本来の意味から離れ, 新しい意味に転用される用例が現れる。

一方, 蘭学資料では, 例えば, 『曆象新書』(1798, 中編付録)に「問ふ, 晴雨玻瓈(ガラス)管中にて, 水銀以上は真空なりや」という用例が見られ, 『窮理通』(1836, 卷7)には, 「硝管中の水銀上に絶えて駭雜の無し。然れども人未だ其れをして真空ならしむること能はず」とある。この2例はともに「物質が全く存在しない空間」という現代語と一致する意味に転用されている。時間的前後関係で見ると, 現代語と一致する「真空」の意味が蘭学資料に最初に出現し, 数十年経てようやく宣教師資料に登場することになるが, 前述の「金属」と同様, 宣教師資料における「真空」の意味変化の背後に蘭学資料からの影響があったかどうかは, さらに検討が必要である。

5.3 日中共通の「出典なし」の語

宣教師資料と蘭学資料とともに見られるが, 漢籍に出典を見出せず, 日中双方で別々に造られたのか, それとも, 一方で造られ他方に伝えられたのかが証拠不明のものをさす。この種に属する25語を示すと, 次のようになる。

圧力	液質	塩質	凹鏡	過久	眼球	吸力	原質	原力	雜質	酸質
磁気	斜面	重点	縮力	性能	速力	張力	定点	糖質	凸鏡	能動
油質	力点	涙囊								

この種の語は, 日中共通の二字語では13.4%を占め, 宣教師資料の二字語全体で見ると, わずか1.5%を占めるに過ぎない。しかし, 蘭学資料から宣教師資料へ伝わる借用語があったかどうかを解明する際の重要な部分に当たるので, 詳細な調査が求められる。蘭学資料が19世紀前半に集中し, 宣教師資料が19世紀後半に分布しているため, 時期の早い蘭学資料から時期の遅い宣教師資料への語彙借用が容易に推測されるが, 実際に語の出自判断を試してみると, 事情がより複雑であることがわかる。現時点では, この25語の出自については, 諸要因を総合的に考えて, 三つのグループに分類した。

5.3.1 日中双方で別々に造られ, 語形が偶然に一致したもの (18語)

日中共通の「出典なし」の語には, 「-質」(液質, 塩質, 雜質, 原質, 酸質, 糖質, 油質), 「-力」(圧力, 吸力, 原力, 縮力, 速力, 張力), 「-点」(重点, 定点, 力点)といった後語基を持つ二字語が多数含まれている。これらの語の初出例を並べてみると, いずれも, 蘭学資料の用例

が宣教師資料の用例より十数年ないし数十年も先に出現していたことがわかる。「油質」を例に取ってみると、日中双方の初出例は以下の通りである。

- ・(蘭) 論者以為へらく、油質を夾むと。然れども分析家、未だ析出する能はざるなり。『窮理通』(帆足万里撰、1836、卷3)
- ・(宣) 所欲鍛之物、均須擦摩極淨、浸入鉀養水内、去其油質。(メッキを施したい物は、みな磨いてきれいにし、カリウム水溶液に浸けてその油質を取るべきだ)《電学須知》(傅蘭雅著、1887、第6章)

もし用例の年代差だけで判断すれば、蘭学者の造語が早いことになるが、「出典なし」の語以外の既存漢語や同一語基の造語状況へ視野を広げ、造語機能からもアプローチすることが必要である。例えば、宣教師資料では、「-質」を後語基に持つ二字語が計69語あるが、このうち、漢籍出典のある語が47語(68.1%)で、漢籍出典のない語が22語(31.9%)となっている。後者の22語中の7語が日中共通の「出典なし」の語に当たるので、全69語に占める割合は10.1%に過ぎない。一方、蘭学資料では、「-質」を後語基に持つ二字語が計44語あって、漢籍出典のある語とない語は、それぞれ24語(54.5%)と20語(45.5%)に二分できる。日中共通の「出典なし」の語が7語あるので、全44語に占める割合が15.9%になる。

4.2に述べたように、宣教師資料と蘭学資料を問わず、漢籍から「-質、-力、-点」などに関する造語パターンを受け継ぎながら、「-質、-力、-点」などの後語基を持つ新語を多数造り出していたことが観察されている。日中双方がともに後語基に関する造語機能を備えていたという前提があれば、「-質、-力、-点」タイプの新語が蘭学資料と宣教師資料で別々に造られる可能性が十分考えられよう。この意味で、日中共通の「出典なし」の語は、日中双方で別々に造られた新語の一部がたまたま同じ語形になったことの現れとしてとらえても差し支えない。

「-質、-力、-点」の後語基を持つ諸語に加え、「磁気」と「涙囊」の2語も日中別々に造られた語だろうと推測される。「磁気」は、蘭学資料での初出例が『理学提要』(1852)に出ているほか、その他の資料にも「空氣、伸氣、大氣、燃氣、冷氣」などの「-氣」を後語基に持つ二字語が9語見られる。一方、宣教師資料では、「磁気」の初出例が蘭学資料の用例より十数年遅れて《格物入門》(1868)に登場するが、ほかの資料にも「空氣、湿氣、地氣、毒氣、病氣、風氣」など計24語用いられている。日中双方がともに「-氣」を後語基に持つ二字語を造り出す機能を備えていた事実を踏まえ、「磁気」は日中双方で別々に造られ、語形が偶然に一致した語だろうと考える。

また、「涙囊」は、蘭学資料では、『眼科新書』(1815)に初出例が見られるものの、「-囊」を後語基に持つ二字語はこの1語しかなかった。一方、宣教師資料では、《格物探原》(1876)になつて初出例が出てくるが、「涙囊」のほか、「-囊」を後語基に持つ「腎囊」(《内科新説》1858)と「胆囊」(《全体須知》1894)の用例がある。このように、日中双方の初出例に60年ほどの隔たりがあることと、中国語側に「-囊」タイプの造語機能が備わっていたと思われることから、「涙囊」は日中双方で別々に造られた語として位置付けたい。

5.3.2 調査範囲の制約により早い出典例が発見できなかったもの（5語）

日中共通の「出典なし」の語には、日中双方の初出例がわずか数年の差で接近しているものが見られる。例えば、「斜面」という語は、宣教師資料での初出例が《六合叢談》(1858) にあるが、蘭学資料での初出例は『氣海觀瀾廣義』(1855) に出ているので、宣教師資料のそれより3年ほど早い。双方の初出例は次の通りである。

- ・(宣) 助力之器有三種, 曰桿, 曰滑車, 曰斜面, 是為原器。(助力の器具に三種有り, 桿と云い, 滑車と云い, 斜面と云う。これらは基本器具を為す) 《六合叢談》(偉烈亜力編, 1858, 2卷1号)
- ・(蘭) 故二人高處ヨリ落ツレバ痛傷甚劇ク, 斜面ニ従テ下レバ損傷ナシ。『氣海觀瀾廣義』(川本幸民訳, 1855, 卷5)

「斜面」のほか、「過久」も蘭学資料での初出例が宣教師資料より数年早い語に属する。一方、「能動」のように日中双方の初出例が同じ年になる語も見られるし、「凹鏡」と「凸鏡」のように、ペアをなす語の前者は宣教師資料での用例が早いのに、後者は逆に蘭学資料での用例が早いケースもある。

つまり、小論の用語調査では、19世紀後半のプロテスタント宣教師資料を対象としたが、19世紀前半のプロテスタント宣教師資料（蘭学資料とほぼ同時期）や、明末清初（1580–1710）のカトリック宣教師資料（蘭学資料より50年以上早い）には及んでいない。そのため、資料範囲をさらに拡大し、年代のより古い資料でより早い用例を見出せたら、現在の初出例の年代及び出自が修正される可能性が十分あると思われる。

5.3.3 何らかのルートで蘭学資料から宣教師資料に伝わったもの（2語）

蘭学資料と宣教師資料の間に時間的前後関係があるにもかかわらず、これまでに、蘭学資料にある日本漢語が宣教師資料に取り入れられたようなことを指摘する論考に接したことはない。筆者自身も、蘭学資料と宣教師資料における三字語と四字語の比較対照を通して、日中双方の用語の類似度がかなり低いことを指摘している（朱京偉 2011b の7節と朱京偉 2013 の7節を参照）。おそらく、19世紀後半の時点では、蘭学書の輸入は無論のこと、中国に持ち込まれた日本語の書物自体も極めて少なかつただろうと推測される。こうした背景の下で、十分な証拠がない限り、蘭学資料で造られた新語が宣教師資料に取り入られたなどとは言いにくいが、以下は、その可能性を完全に排除できないという意味において、「眼球」と「性能」の2語を説明したい。

まず、「眼球」は、蘭学資料では、『曆象新書』(1798) に初出例が出ている。その後、『医範提綱』(1805)、『眼科新書』(1815) と『窮理通』(1836) などに受け継がれ、着実に定着度を高めていたと見られる。一方、宣教師資料では、「眼球」の初出例が蘭学資料に50数年遅れて、《遐邇貢珍》(1855) に登場するが、その後、《格物探原》(1876) には「睛球」、《全体須知》(1894) には「睛珠」と、異形の語が見えるものの、「眼球」の用例は二度と現れなかった。日中双方の初出例は以下の通りである。

- ・(蘭) 亜 (a) より胼 (b) に至るを眼球の上面とす。田 (d) 厄 (g) を眼底とす。『暦象新書』(志筑忠雄訳, 1798, 上編卷之上・視動上)
- ・(宣) 脳底有脳氣筋九対, 第一対入鼻司聞香臭, 第二対入眼球司觀万物。”(脳底には九ペアの神経があるが, 一つ目は鼻に入って匂いを嗅ぐのを司り, 二つ目は眼球に入って万物を観るのを司る) 《遐邇貫珍》(麦都思編, 1855, 第6号, 脳為全体之主論)

宣教師資料では, 「眼球, 睛球」のほか, 「火球, 気球, 星球, 地球, 天球, 半球」などの語が複数の資料に見られることから, 当時の中国語に「-球」を後語基に持つ二字語を造り出す機能が備わっていたと思われるが, 「大きい球体」を表現するほかの語と, 目玉という「小さい球体」を表現する「眼球, 睛球」との間に, 発想のずれがあることは確かである。このように, 「眼球」という語は, 蘭学資料では安定的・継続的に使われたのに対して, 宣教師資料では孤立的・偶発的な用例しか見当たらなかった。これを踏まえて, 宣教師達が何らかのルートを通して蘭学の書物を入手し, 「眼球」という語を取り入れた可能性が依然残されているように思われる。

次に, 「性能」は, 蘭学資料では, 『氣海觀瀾廣義』(1856) に初出例が出ているが, 宣教師資料では, 蘭学資料に20年ほど遅れて, 《格物探原》(1876) に初出例が現れている。双方の初出例は以下の通りである。

- ・(蘭) 尚, 其混和スル所ノ品物ノ性能ニ従ヒテ, 療病ノ為ニ或ハコレニ浴シ, 或ハ内服スルコト亦一ナラス。『氣海觀瀾廣義』(川本幸民訳, 1856, 卷7・水)
- ・(宣) 微渺一一各有性能, 有牽合之性如膠投漆, 有推拒之性如水與油…。(諸々の微小物に各自の性能が有る。引き付ける性質を有するものはにかわと漆のように互いに粘る。拒み合う性質を有するものは, 水と油のように乖離する) 《格物探原》(韋廉臣著, 1876, 3卷第1章)

蘭学資料では, 「性能」のほか, 同じく「-能」を後語基に持つ二字語に「機能」がある。この2語における「-能」はともに, 能力を意味する名詞性語基で, 前語基と結合して「N+N 連体修飾関係」の二字語を形成している。一方, 宣教師資料では, 「性能」と並んで, 同じ後語基を持つ語として「可能, 全能, 本能」が挙げられる。この3語における「-能」は日本語の「あたう, できる」の意に相当する動詞性語基で, 副詞性の前語基と結合して M+V 連用修飾関係の二字語となる。

このように, 語構成の視点で見ると, 蘭学資料の「-能」は名詞性語基の意味合いを持つのに対して, 宣教師資料の「-能」は「性能」を除いて, むしろ動詞性語基の用法に傾いている。「性能」は, 昔の漢籍に出典を見出せず, 宣教師資料に初めて出現した語で, しかも, この1語だけが蘭学資料にある同形語の語構成と一致する。このことから, 直接的あるいは間接的に蘭学資料から取り入れられた可能性があるように思われる。

6. 二字語と三字語のつながり

蘭学資料の二字漢語を取り上げた際, 二字漢語の後語基で, 造語数が多ければ多いほど, 三

字漢語の後部一字語基として用いられる確率が高くなるということが明らかになった（朱京偉 2015 の 6.1 を参照）。この節では、宣教師資料の二字語についても同様な調査を実施し、二字語の後語基と三字語の後部一字語基のつながりを明らかにするとともに、蘭学資料との対照を行ないたい。

6.1 共通に用いられる後語基の特徴

共通に用いられる後語基とは、宣教師資料において、二字語の後語基としてだけでなく、2+1型三字語の後部一字語基としても用いられているものをさす。表 10 に、二字語の後語基と三字語の後部一字語基のつながりをまとめた。

表 10 二字語の後語基と三字語の後部一字語基のつながり（カッコ内は %）

二字語の後語基		三字語の後語基		語例（二字語の後語基→三字語の後語基）
造語数	語基数	あり	なし	
69–39	4	4 (100)	0	流質→蛋白質、水力→吸引力、悪性→滲濾性、人体→六面体
36–20	5	4 (80.0)	1 (20.0)	生物→液質物、枕骨→舌根骨、病氣→天空氣、曲線→地平線、消化→（なし）
19–10	22	13 (59.1)	9 (40.9)	地学→數理学、立法→代数法、血管→吸水管、熱度→經緯度、地面→地球面、行星→天王星、機器→發電器、地形→三角形、国会→天地会、交点→重心点、薄膜→中耳膜、読者→居住者、減税→進口税
9–5	58	41 (70.7)	17 (29.3)	軌道→平円道、銀行→貿易行、船費→寄信費、涙核→軟質核、眼界→眼窩界、遠鏡→映画鏡、眼球→軽気球、常数→至大数、地心→悔改心、腸炎→膀胱炎、腸病→心肺病、内部→頭骨部、水車→火輪車、運船→西洋船、人類→動物類、など
4–2	161	50 (31.1)	111 (68.9)	版図→地球図、中軸→中立軸、形状→中風状、教場→畜獸場、上等→第一等、生根→平方根、蓄積→平方積、回教→天主教、原人→異邦人、哺乳→牛羊乳、教師→天文師、医士→博学士、干事→本分事、汲水→大麦水、小脳→大小脳、など
1	247	29 (11.7)	218 (88.3)	上層→灰石層、紅茶→出口茶、雜貨→入口貨、骨節→屈伸節、汗孔→吹氣孔、限量→有限量、電瓶→蓄電瓶、温泉→自湧泉、工商→他国商、公使→布政使、時速→光行速、講堂→礼拝堂、磁鉄→防雷鉄、など
(1653)	497	141 (28.4)	356 (71.6)	

表中の「二字語の後語基」では、造語数の多い順によって幾つかの区切りを設けて、各区切りに対応する後語基の語基数を示している（表 4 参照）。「三字語の後語基」では、二字語の後語基との照合を通して、三字語の後部一字語基を、二字語の後語基と同形かそうでないかによって二分している。同形であれば、二字語の後語基とのつながりがあるものとして「あり」のほうに、同形でなければ、つながりがないものとして「なし」のほうに、それぞれの語基数を記入した。

表 10 によると、造語数 69–39 語の二字語の後語基は、4 語基とも三字語の後部一字語基とし

ても用いられている。造語数 36–20 語の二字語の後語基でも、5 語基中の 4 語基 (80%) が同時に三字語の後部一字語基として用いられている。これに対して、造語数 1 語だけの二字語の後語基を見ると、計 247 語基の中で、三字語の後部一字語基になれたものはわずか 29 語基 (11.7%) しかない。つまり、二字語の後語基で、造語数が多ければ多いほど、三字語の後部一字語基として用いられる確率が高い。その反面、後語基の造語数が少なくなるにつれ、三字語の後部一字語基とのつながりが薄くなっていく。この結果は、小論 (2015) で指摘した蘭学資料の二字漢語に見られる傾向と完全に一致するものである。

6.2 同一後語基による造語数の比較

前節において、主に「あり／なし」の視点から二字語と三字語のつながりについての全体像を概観した。ここでは、宣教師資料の二字語で造語数 10 語以上の後語基（計 31 種）を対象に、三字語の後部一字語基になれたもの（21 種、表 11）となれなかったもの（10 種）をそれぞれ明示するとともに、宣教師資料と蘭学資料での造語数と関連付けて、日中間の共通点と相違点を探ってみたい。まず、二字語の後語基で、三字語の後部一字語基になれたものを見よう。（カッコ内の数字は語数）

表 11 同一後語基で見る二字語と三字語の造語数及び日中比較

後語基	二字語の語例	三字語の語例
−質	性質、体質、物質、本質（宣 69／蘭 44）	硫黃質、硬殼質、石灰質、蛋白質、白粉質（宣 6／蘭 21）
−力	圧力、重力、張力、能力（宣 53／蘭 23）	化学力、吸鉄力、速率力、電気力、離心力（宣 28／蘭 41）
−性	形性、固性、水性、物性（宣 40／蘭 44）	吸鉄性、滲濾性（宣 2／蘭 37）
−体	球体、肢体、星体、物体（宣 39／蘭 33）	記事体、三棱体、玻璃体、容電体、六面体（宣 6／蘭 21）
−物	貨物、器物、生物、腐物（宣 36／蘭 5）	異性物、液質物、尋常物、動植物、無生物（宣 18／蘭 12）
−骨	脆骨、頭骨、眉骨、腕骨（宣 31／蘭 9）	鎖柱骨、手腕骨、人頭骨、舌根骨、螺紋骨（宣 45／蘭 4）
−気	湿気、生気、天気、毒気（宣 24／蘭 9）	吸鉄気、水母気、炭養気、空気、平常気（宣 5／蘭 7）
−線	曲線、垂線、中線、直線（宣 20／蘭 20）	経緯線、対角線、地平線、電気線、抛物線（宣 11／蘭 26）
−学	医学、社学、数学、入学（宣 18／蘭 1）	光質学、格致学、植物学、数理学、地理学（宣 9／蘭 13）
−法	公法、合法、国法、手法（宣 18／蘭 3）	外国法、三角法、代数法、日食法、練兵法（宣 22／蘭 43）
−管	気管、食管、銅管、涙管（宣 14／蘭 5）	回血管、圧水管、吸液管、血脈管、精液管（宣 23／蘭 11）
−度	緯度、角度、高度、斜度（宣 11／蘭 15）	経緯度、結氷度、斜角度、水沸度、折光度（宣 5／蘭 2）
−面	海面、局面、斜面、側面（宣 11／蘭 7）	円柱面、横截面、赤道面、地球面、地平面（宣 9／蘭 3）
−星	火星、行星、恒星、流星（宣 11／蘭 9）	掃把星、天王星（宣 2／蘭 0）
−器	楽器、測器、鉄器、電器（宣 11／蘭 4）	角度器、煮飯器、助力器、蒸氣器、摩電器（宣 15／蘭 12）
−形	鼓形、地形、定形、囊形（宣 11／蘭 3）	三角形、十字形、馬掌形、有孔形、立方形（宣 13／蘭 4）
−会	議会、国会、照会、入会（宣 11／蘭 0）	格致会、祈祷会、三合会、天地会、法師会（宣 6／蘭 0）
−点	極点、重点、質点、力点（宣 10／蘭 21）	聚熱点、水沸点、中心点、凍氷点、沸水点（宣 16／蘭 5）
−膜	隔膜、耳膜、皮膜、網膜（宣 10／蘭 10）	耳底膜、中耳膜（宣 2／蘭 6）
−者	学者、作者、死者、読者（宣 10／蘭 1）	居住者、好事者、造物者、旁観者、予言者（宣 25／蘭 0）
−税	課税、重税、納税、免税（宣 10／蘭 0）	進口税（宣 1／蘭 0）

表11では、宣教師資料の二字語と三字語で共通に用いられる後語基とその語例を、二字語の造語数の多い順に掲げている。二字語のほうを見ると、「－会（宣11／蘭0），－税（宣10／蘭0）」のように、蘭学資料には同一後語基を持つ二字漢語がなかったり、或いは、「－性（宣40／蘭44），－点（宣10／蘭21）」のように、蘭学資料の二字漢語が逆に宣教師資料の語数を上回ったりするものもあるとはい、全体的には、宣教師資料の語数が蘭学資料の語数を上回るもののが圧倒的に多い。これに対し、三字語のほうでは、「－者（宣25／蘭0），－会（宣6／蘭0），－星（宣2／蘭0），－税（宣1／蘭0）」のように、宣教師資料には三字語があって、蘭学資料には三字漢語がないものも見られるが、宣教師資料の造語数が多いものと蘭学資料の造語数が多いものとは大差なくほぼ半分ずつ占めている。

以上をまとめると、まず、宣教師資料の二字語で、造語数10語以上の後語基の9割近くが三字語の後語基として用いられていることを指摘できる。次に、二字語の後語基では、宣教師資料の造語数が蘭学資料のそれを上回るものが圧倒的に多いのに対し、三字語の後部一字語基では、宣教師資料の造語数が多いものと蘭学資料の造語数が多いものとはほぼ半分ずつ占めている。換言すれば、蘭学資料では、二字語の後語基に比べて、三字語の後部一字語基による造語が比較的活発に行なわれていた。

一方、表10に示した通り、二字語の後語基には三字語の後部一字語基になれなかつたものも存在する。例えば、造語数10語以上の区切りで、三字語の後部一字語基になれなかつたものとして次の10語基が挙げられる。（カッコ内の数字は三字語の語数）

- －員（宣0／蘭0）－化（宣0／蘭0）－權（宣0／蘭0）－定（宣0／蘭0）
- －電（宣0／蘭0）－用（宣0／蘭0）－証（宣0／蘭20）－期（宣0／蘭13）
- －品（宣0／蘭10）－動（宣0／蘭3）

このうち、「－員、－化、－權、－定、－電、－用」の6語基は、宣教師資料と蘭学資料でともに三字語の後部一字語基になれなかつたもので、「－証、－期、－品、－動」の4語基は、宣教師資料で三字語の後部一字語基になれず、蘭学資料でなれたものである。さらに、検討の範囲を造語数9–5語の区切りまで拡大してみると、次の17語基は、三字語の後部一字語基になれなかつたものに当たる。

- －位（宣0／蘭0）－価（宣0／蘭0）－科（宣0／蘭0）－議（宣0／蘭0）
- －経（宣0／蘭0）－産（宣0／蘭0）－視（宣0／蘭0）－食（宣0／蘭0）
- －生（宣0／蘭0）－成（宣0／蘭0）－戦（宣0／蘭0）－年（宣0／蘭0）
- －能（宣0／蘭0）－胞（宣0／蘭0）－流（宣0／蘭0）－機（宣0／蘭22）
- －中（宣0／蘭10）

このように、造語数9–5語の区切りでは、宣教師資料と蘭学資料でともに三字語の後部一字語基になれなかつたものが17語基中の15語基を占めている。残りが、宣教師資料で三字語の後部一字語基になれず、蘭学資料でなれた「－機、－中」の2語基である。前述の造語数10語以上

の区切りに比べ、三字語の後部一字語基になれなかつたものが大幅に増えていることがわかる。これは、造語数の少ない二字語の後語基になると、三字語の後部一字語基とのつながりが薄くなつていくことの現れである。

7. 二字語と四字語のつながり

明治期では、既成の二字漢語が二つ結合して、例えば、「社会意識、社会運動、社会制度／経済社会、原始社会、産業社会」のように、系列的に四字漢語が形成されるという造語上の特徴があつた（朱京偉 2007 の 7 節を参照）。その前期に当たる江戸の蘭学期にこのような特徴が見られたかどうかを明らかにするために、小論（2015）で、すでに蘭学資料における二字漢語と四字漢語のつながりについて検討した（朱京偉 2015 の 7 節を参照）。ここでは、同じ方法で宣教師資料の四字語を調べ、日中双方の調査結果を比較してみたい。

宣教師資料の二字語と四字語の関係を調べるために、まず、朱京偉（2013）で取り上げた宣教師資料の 2+2 型四字語（294 語）を前語基（前部二字語基）と後語基（後部二字語基）に分け、それから、本稿で取り上げた二字語（1653 語）を使って、その両方との照合を行なう。この作業によって、四字語の前語基と後語基に用いられた二字語が明らかになった。

表 12 四字語の前語基と後語基に用いられた二字語

造語数	前語基数	前語基の語例	後語基数	後語基の語例
5	1	電気－	1	－電気
4	0		4	－圧力、－器具、－軌道、－総管
3	4	肌肉－、国法－、水気－、地球－	6	－運動、－遠鏡、－機器、－細胞、 －消化、－彗星
2	7	火車－、形体－、交戦－、骨体－、 自立－、助力－、流質－	7	－吸力、－権利、－自主、－収縮、 －条規、－鉄道、－凸鏡
1	49	化学－、化分－、回光－、汲水－、 空気－、減血－、鼓形－、交感－、 行星－、合力－、国勢－、骨衣－、 常用－、食物－、人物－、精液－、 脊髄－、地心－、地面－、地理－、 電線－、電報－、内政－、日用－、 脳胞－、灰質－、風気－、返照－、 哺乳－、防雷－、螺旋－、など	64	－火力、－過多、－過度、－貨物、 －角度、－気機、－経線、－汗管、 －教師、－公会、－公司、－財源、 －産業、－常例、－津液、－精神、 －脆骨、－電光、－電纜、－電路、 －動作、－動物、－脳結、－兵船、 －平流、－胞膜、－牧師、－面積、 －螺旋、－律法、－略論、など
合計	61	(全 1653 語の 3.7% に当たる)	82	(全 1653 語の 5.0% に当たる)

表 12 によると、四字語の前語基に用いられた二字語では、造語数 5 語の「電気」がトップに立ち、「電気伝成、電気伝信、電気動力、電気推引、電気阻力」の諸語が造られている。これに、造語数 3 語の「肌肉－、国法－、水気－、地球－」や、造語数 2 語の「火車－、形体－、交戦－、骨体－、…」などが続く。全体的に見て、四字語の前語基になった二字語は 61 語だけに止まり、二字語全体（1653 語）のわずか 3.7% を占めるに過ぎない。しかも、造語数 3 語以上の二字語基がかなり少ないので、造語数 1–2 語だけの二字語基が 61 語基中の 56 語基（91.8%）を占め、

圧倒的に多い。つまり、四字語の前語基となった二字語の造語力が全般的に弱いというべきであろう。

一方、四字語の後語基に用いられた二字語を見ると、「電気」は「異種電気、異性電気、収聚電気、同種電気、同性電気」といった四字語に用いられたことで、前語基と同じく造語数のトップに立っている。このほか、造語数4語のものには「-圧力、-器具、-軌道、-総管」が見られる。四字語の後語基になった二字語は82種あり、前語基の61語に比べて、やや多くなっているため、二字語全体に占める比率も少し向上して、5.0%となっている。しかし、後語基においても、造語数1-2語だけの二字語基が82語基中の71語基(86.6%)を占め、前語基と同様な傾向を見せている。

また、四字語の前語基と後語基とともに用いられた二字語基は5語だけに限られる。前述した「電気」(10語、前5/後5)のほか、「形体」(形体氣象、形体式様/成物形体)、「血脉」(血脉総管/培養血脉)、「食物」(食物消化/権化食物)、「体質」(体質純全/人物体質)などがそれに当たる。上掲の諸例でわかるように、それぞれの造語数も1-2語だけに止まっている。

蘭学資料と比較すると、まず、蘭学資料では、四字漢語の前語基と後語基に用いられた二字漢語がそれぞれ二字漢語全体の9.9%と7.8%を占めている(朱京偉2015の7.1にある表8を参照)。これに対して、宣教師資料では、それぞれ3.7%と5.0%となっていて、蘭学資料よりも低下している。つまり、宣教師資料では、四字語の前語基と後語基に用いられた二字語がごく少数で、二字語と四字語のつながりがかなり薄いということが言える。次に、造語数1-2語だけの二字語基が全語基数に占める比率についての日中比較をすると、蘭学資料では、それぞれ、前語基の80%と後語基の76.3%を占めているが、宣教師資料では、前語基の91.8%と後語基の86.6%を占めているので、蘭学資料に比べて、比率が大幅に上がっている。つまり、宣教師資料では、四字語の前語基と後語基になった二字語の造語力が蘭学資料のそれよりも弱く、臨時語の性質がもっと強くなることが指摘できよう。最後に、宣教師資料と蘭学資料の四字語にともに用いられている二字語として、「地球、風気、感動」などの22語が挙げられる。この諸語の使われ方に関しては、筆者(2013)の第7節で詳しく述べたので、そちらを参照されたい。

8. おわりに

本稿では、語構成の諸問題をめぐって、宣教師資料から抽出した二字語を検討するとともに、蘭学資料の二字漢語との対照を行なってきた。その結果を次にまとめよう。

(1) 二字語の語構成パターンで、日中間の相違がよく現れたのは連体修飾関係の二字語である。これに属するN+N型、V+N型、A+N型の3タイプを合計すると、宣教師資料では73.0%、蘭学資料では73.7%となるので、日中間ではほぼ同様な比率を占めている(表2)。しかし、タイプ別に見ると、宣教師資料ではN+N連体修飾関係の二字語が全語数の48.4%を占め、蘭学資料では35.5%となる。一方、蘭学資料ではV+N型とA+N型がそれぞれ全語数の20.8%と17.4%なのに對し、宣教師資料では同型の語が12.8%と11.8%を占めている。つまり、連体修飾関係の3タイプにおいて、宣教師資料ではN+N型の比率が高いのに対して、蘭学資料では逆にV+N型と

A+N 型の比率が高くなっていることが指摘できる。

(2) 宣教師資料と蘭学資料の間に語彙交流があったかどうかについては、主として日中共通の二字語を検討することで、解明を図る必要がある。対象となった宣教師資料と蘭学資料において、日中共通の二字語は計 186 語となっており、宣教師資料の二字語（1653 語）の 11.3% と蘭学資料の二字漢語（755 語）の 24.6% に相当するが、この中で、漢籍由来の「出典あり」の語が 159 語（85.5%）を占めている（表 9）。ちなみに、小論（2015）によると、同様な資料範囲で日中共通の 2+1 型三字語は 20 語ほど数えられ、宣教師資料の三字語（834 語）の 2.4% と蘭学資料の三字漢語（724 語）の 2.8% に相当する。それに、日中共通の 2+2 型四字語は「食物消化」の 1 語だけである。この一連の調査によって、宣教師資料と蘭学資料における用語の重複度が全体的にかなり低いことが明らかになった。

(3) 日中共通の「出典あり」の語は、蘭学資料と宣教師資料の間に借用関係が存在するというよりも、日中双方が年代の古い漢籍から別々に取り入れたものだろうと思われる。日中共通の「新義あり」の語（金属、真空）については、漢籍の用例で見る限り、新義発生の兆しが見えてはいたが、新義に転用された初出例は蘭学資料に出ていたと見られる。そのため、新義が日中双方で別々に生じたと見るか、それとも、新義への転用が蘭学資料に始まり、何らかのルートを通して中国語に伝わったと見るべきかは、現状では断言しにくい。日中共通の「出典なし」の語については、①日中双方で別々に造られ、語形が偶然に一致したもの、②調査範囲の制約でより早い出典例が発見できなかったもの、③何らかのルートで蘭学資料から宣教師資料に伝わったものという三つに分けて、それぞれの根拠を説明した。

(4) 二字語と三字語のつながりについては、今回の調査で、二字語の後語基で、造語数が多ければ多いほど、三字語の後部一字語基として用いられる確率が高い、その反面、後語基の造語数が少なくなるにつれ、三字語の後部一字語基とのつながりが薄くなるという結果を得た。これは、蘭学資料の二字漢語に見られる傾向と完全に一致するものである。一方、二字語と四字語のつながりについては、宣教師資料では、四字語の前語基と後語基に用いられた二字語がそれぞれ二字語全体の 3.7% と 5.0% を占めている（表 12）。これは蘭学資料の 9.9% と 7.8% に比べ、さらに低下していることがわかる。つまり、宣教師資料では、四字語の前語基と後語基に用いられた二字語がごく少数で、二字語と四字語のつながりがかなり薄いということが指摘できる。

筆者は、一連の論考（2011a, 2011b, 2011c, 2013）で、蘭学資料と宣教師資料の三字語、および、蘭学資料と宣教師資料の四字語を取り上げてきた。本稿を以て、蘭学資料と宣教師資料についての対照研究が一応完成されることになる。研究対象に選んだのは蘭学資料と宣教師資料の一部であるが、当該資料の語構成を検討するのに充分な分量だろうと考えた。これまでに、蘭学資料と宣教師資料の用語を別々に取り上げた研究は見られるものの、両者の比較対照に関してはあまり進んでいない状況にある。このような日中対照を通して、19 世紀当時の日中語彙の実態解明のみならず、明治期以後の漢語研究にとっても有益な示唆を与えることができたらと願う。

参照文献

- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』 東京: 白帝社.
- 古田東朔 (1963) 「幕末・明治初期の訳語—『民間格致問答』を中心として—」『国語学』 53: 28–38.
- 松井利彦 (1979) 「近代漢語の伝播の一面」『広島女子大学文学部紀要』 14: 95–104.
- 松井利彦 (1980) 「近代漢語の定着の一様相」『広島女子大学文学部紀要』 15: 49–60.
- 松井利彦 (1983) 「近代日本漢語と漢訳書の漢語」『広島女子大学文学部紀要』 18: 35–51.
- 松井利彦 (1985) 「漢訳『万国公法』の熟字と近代日本漢語」『国語と国文学』 62(5): 67–77. 東京大学国語国文学会.
- 森岡健二 (1969) 『近代語の成立—明治期語彙編』 東京: 明治書院 (1991 改訂版).
- 佐藤亭 (1980) 『近世語彙の歴史的研究』 東京: 桜楓社.
- 佐藤亭 (1986) 『幕末・明治初期語彙の研究』 東京: 桜楓社.
- 朱京偉 (2007) 「明治期における社会主義用語の形成」 内田慶市・沈国威 (編) 『19世紀中国語の諸相』 193–215. 東京: 雄松堂.
- 朱京偉 (2011a) 「蘭学資料の三字漢語についての考察—明治期の三字漢語とのつながりを求めて—」『国語研プロジェクトレビュー』 4: 1–25. (冊子体の第1巻 117–141に収録). 国立国語研究所.
- 朱京偉 (2011b) 「在華宣教師の洋学資料に見える三字語—蘭学資料との対照を兼ねて—」『国立国語研究所論集』 1: 93–112.
- 朱京偉 (2011c) 「蘭学資料の四字漢語についての考察—語構成パターンと語基の性質を中心に—」『国立国語研究所論集』 2: 165–184.
- 朱京偉 (2013) 「在華宣教師の洋学資料に見える四字語—蘭学資料の四字漢語との対照を兼ねて—」『国立国語研究所論集』 6: 245–271.
- 朱京偉 (2015) 「蘭学資料の二字漢語とその語構成的特徴」 斎藤倫明・石井正彦 (編) 『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』 214–233. 東京: おうふう.

Two-Chinese-character Words in Missionaries' Documents in China: A Comparison with the Written Documents of Dutch Studies in Japan

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University /
Invited Professor, Department of Linguistic Theory and Structure, NINJAL [-2010.10]

Abstract

In a previous article (Zhu 2015), I considered two-Chinese-character words in written materials of Dutch Studies in the Edo era. The current paper focuses on Chinese missionary materials, comparing two-Chinese-character words found therein with those of the Dutch Studies' written documents. My primary conclusions are as follows.

First, with regard to word structure patterns, differences frequently occur in adnominal two-Chinese-character words. In missionary materials, the percentage of N+N pattern is very high, while in the materials of Dutch Studies V+N and A+N are high.

Second, there are 186 common words in both materials, of which 85.5% (159 words) are from classical Chinese and 14.5% (27 words) have a new meaning or are not from classical Chinese. The words from classical Chinese have not been adopted from the materials of Dutch Studies into missionary materials, or vice versa; rather, they have been separately adopted from classical Chinese. On the other hand, the words that are not from classical Chinese fall into one of the three following categories: i) words separately created in China and Japan that coincidentally match in form, ii) words for which an earlier source could not be found due to the limited scope of the study, or iii) words that spread in some way from the documents of Dutch Studies to missionary materials.

Lastly, with regard to the relationship between two-Chinese-character words and three-Chinese-character words, in this study it became clear that the greater the number of neologisms in the posterior morpheme of two-Chinese-character words, the higher the probability that they would be used as the posterior single-morpheme of three-Chinese-character words. On the other hand, two-Chinese-character words and four-Chinese-character words are only weakly connected: in missionary materials, only 3.7% of two-Chinese-character words are used as the anterior morpheme of four-Chinese-character words, and only 5.0% as the posterior morpheme.

Key words: two-Chinese-character word, missionaries' documents in China, written documents of Dutch Studies, word formation pattern, morpheme